

中部部会の歩みと展望

安村 仁志

“狐はたぐさんのことを知っているが、
ハリネズミはでかいことを一つだけ知っている”

(ギリシアの詩人アルキロコス)

福音主義神学会が発足して40年経った。東部―西部の二部会制が12年ほど続いた時点で、神の導きのもとにわれわれ中部部会が産声を上げた。以来28年部会は守られてきた。感謝をもって、設立の経緯と28年の歩みを振り返りつつ、神学会の今後について課題を探っていききたい。

I. 中部部会の発足

中部部会は1982年7月13日(火)に誕生した。東部、西部の二部会制であったところから、協力・援助を受けながら、西部からの独立の形であった。設立総会議事録には、議長から以下の経過報告がなされたことが記されている。「約1年前から、西部部会理事長鍋谷先生及び橋本龍三先生のご労により中部部会独立の準備が進められ、本年2月16日の中部地区懇談会において設立準備委員会を設置、西部部会及び全国理事会においても承認され、本日に至った」。祝辞に続き、東部からの祝電(「チュウブブカイハッカイヲシユクシニンリノモトニタツキカイノゴハッテンヲイノリマス トウブブカイ」)が披露されている。さらに議事において西部部会への感謝決議がなされている。以上の通り、中部部

会には特に西部部会の援助と、東部部会の支援のもとに発足したのである。

1982年2月16日(火)午後3時より大韓キリスト名古屋教会を会場に、設立準備の中部地区神学講演会が開かれた。西部部会の鍋谷克爾師が来名、「聖書解釈の一考察 詩篇8篇をめぐって」と題する講演がなされた(午後3時～5時 第一講演 出席者15名)。終了後12名で懇談会がもたれ、その場で設立準備委員会が発足し、出席者全員が設立委員となった。準備委員会の世話役には、内村徹母耳、牧田吉和、黒川雄三の三氏が選ばれた。続いて、鍋谷師から「旧約聖書と現代」と題する第二講演がなされた(出席者26名=男性15、女性11)。

その後、上記の通り、同年7月13日(火)午後3時45分から大韓名古屋教会で9名が出席して中部部会設立総会がもたれたのである(出席者 佐々木保雄、木下信行、G.H.バーテル、平良明人、鈴木健之、牧田吉和、内村徹母耳、黒川雄三、安村仁志。西部部会からも記念講演の講師を含め6名が参加)。そして、内村徹母耳(アッセンブリー・オブ・ゴッド 名古屋教会牧師 当時=以下同)、河野勇一(バプテリスト教会連合 緑バプテリスト教会牧師)、黒川雄三(長老教会 志賀教会牧師)、後藤喜良(同盟福音基督教 金山キリスト教会牧師)、鈴木健之(福音自由教会 名古屋教会牧師)、牧田吉和(改革派教会 名古屋教会牧師)、安村仁志(信徒 中京大学助教授)が理事に、理事長には黒川雄三氏が選出された。活動方針が定められ、春に年次総会と講演会、秋に部内の研究発表会を開くほか、随時講演会・研究会を開催することとなった。設立を記念して、鍋谷師から「福音主義神学の奨め」(午後5時～5時50分)、清水汎氏(奈良女子大学教授、西部部会理事)からは「太宰治と聖書」(午後7時～8時)の二講演がなされた。

これを受け、同年10月には中部部会発足の報告と入会案内が地区関係者に送られている。それには丸山忠孝全国理事長の挨拶「神学会は13年にわたる歩みを踏んできました。今般、中部部会が発足し、東部と西部に加え、神学会の活動に地域的な広がりが増し、喜びにたえません……」¹と、中部部会理事(一同)より入会を勧める「本年7月13日に、日本福音主義神学会・中部部会が発足いたしました。これによって、今までは大阪方面から東京方面へ出かけなければ、

¹ 1982年10月付けの案内「日本福音主義神学会中部部会発足の御報告と御入会の御案内」

直接の活動のチャンスを得られなかった、中部地方の教職・信徒が神学研究を励まし合う場を、身近に持つことができようになり……」が載せられているが、中部部会設立への潜在的必要性が端的に表わされているといえよう。

同年11月8日(月)午前10時から午後2時15分まで中部部会第1回研究発表会が開かれた。会場は名古屋駅前の中小企業センター7階会議室であった。10時からの開会礼拝(説教 大山忠一名誉会員)に続き、佐々木保雄氏から「労働についての一考察」と題する研究発表(10時半～12時)がなされた。昼食をはさんで、河野勇一氏により「教会成長運動は聖書のか—その神学の序論的考察」と題する第二の研究発表がなされた(12時45分～2時15分)。翌年春の第2回総会(1983年5月16日(月)、中小企業センター、8階4会議室)の時点での会員数は23名であった。その際、「日本福音主義神学会中部部会 第1回研究発表会講演集」と題された、前年度秋の研究発表の内容が掲載されたものが配布された。B5版4ページ(横書き、2列組み)でしっかりしたものであった²。

以上が部会設立前後の動きの一端である。

II. 中部部会の歩み

神の導きにより守られてきた中部部会の活動について、会員数、運営に当たってきた理事会、公開講演会、秋期の研究発表会を見ることが、当部会の特色も浮かび上がってくるものと考え、以下に一覧にして示したい。

年度	会員	理事(理事長、書記、会計、学会誌、無任所の順)	講演会 (敬称略)	研究発表 (敬称略)
1982	不詳	黒川雄三、内村徹母耳、鈴木健之、牧田吉和、河野勇一、後藤喜良、安村仁志	鍋谷克爾「福音主義神学の奨め」清水汎「太宰治と聖書」西部より	佐々木保雄「労働についての一考察」、河野勇一「教会成長運動は聖書のか—その神学の序論的考察」

² 第2号は84年度総会時に配布されたが、以後途絶えてしまった。

1983	23	黒川雄三、内村撒母耳、鈴木健之、牧田吉和、河野勇一、後藤喜良、安村仁志	丸山忠孝「ただキリストのみが聞かれるべきである」、当日タ 同「キリスト者の生き方」東部より	村上久「福音主義における“最後の晩餐”の記述をめぐって—過ぎ越しの食事であったのか、そうではなかったのか」、安村仁志「ギリシヤ正教神祕神学的一面」
1984	26	黒川雄三、内村撒母耳、鈴木健之、牧田吉和、安村仁志	津村俊夫「創世記1章-3章の解釈をめぐって—その歴史性とのかわり」東部より	内村撒母耳「説教論」
1985	35	黒川雄三、内村撒母耳、鈴木健之、牧田吉和、安村仁志	稲垣久和「生命科学とプロテスタンティズムの倫理」、当日タ 同「進化論とキリスト教の世界観」東部より	エミール・デュラワー「《女の頭は男である》ということと女性の奉仕との関係」、明田勝利「信仰告白としての新約聖書における《主》の意味」
1986	38	河野勇一、安村仁志、鈴木健之、黒川雄三、金田幸男	宇田 進「今、聖霊について何が問題となつていのか—争点と聖書的展望」東部より	金田幸男「女性、自由、カルヴァン」、兼松一二「十戒は単なる道徳律か」
1987	36	河野勇一、安村仁志、鈴木健之、黒川雄三、金田幸男	久保田周「異教社会におけるキリスト者の生活—特に仏教との関連において」西部より	鈴木健之「明治期聖公会の岐阜伝道の研究」、西堀則男「韓国人の精神とキリスト教」
1988	42	金田幸男、安村仁志、鈴木健之、黒川雄三、河野勇一、梶日出男	有賀 寿「福音と文化—特に社会的召しの観点から」東部より	小野静雄「学生キリスト教運動における神の国と教会」、入川達夫「福音と文化—日本人に対する宣教論の一考察」

1989	40	金田幸男、安村仁志、鈴木健之、黒川雄三、河野勇一、入川達夫	宇田 進「コンテキスチュアライゼーションの問題—特に具体的な問題との関わりで」東部より	後藤喜良「大嘗祭の諸問題」、櫻井園郎「法と神学」
1990	37	鈴木健之、河野勇一、入川達夫、金田幸男、安村仁志、水上 勲	牧田吉和「現代における聖霊論の問題」西部より	原口貞吉「大嘗祭の問題」、水上勲「解釈学の問題」
1991	36	鈴木健之、河野勇一、入川達夫、金田幸男、安村仁志、水上 勲	鍋谷克爾「現代福音主神学の動向」西部より	奥御山頼義「同盟高山教会の週報に見る戦時中の礼拝」、安村仁志「ロシア文学における聖書的課題」
1992	37	水上 勲、安村仁志、末松隆太郎、金田幸男、河野勇一、入川達夫	津村俊夫「旧約における聖書解釈と説教の接点」東部より	松浦剛「農耕的聖書解釈の試み」、安田恵嗣「正典としての聖書」、R.ヤングブラッド「最近の旧約学における諸問題」
1993	38	水上 勲、安村仁志、末松隆太郎、金田幸男、河野勇一、松浦 剛	中村 敏「日本における宣教の原点を探る」東部より	杉山 明「レビ記の神学をめぐって」
1994	37	水上 勲、安村仁志、末松隆太郎、松浦剛、黒川雄三、小野静雄	石黒次夫「美濃ミッション事件とその教訓」外部より	後藤喜良「現代における礼拝のあり方について」
1995	37	水上 勲、安村仁志、末松隆太郎、隈上正敏、黒川雄三、小野静雄	内田和彦「聖書が教える《霊の戦い》」東部より	井上二郎「信教の自由が守られるために—教会の課題」

1996	37	水上 勲、安村仁志、松浦 剛、隈上正敏、黒川雄三、西堀剛男	渡辺信夫「教会の戦争責任と今後の展望」 東部より	渡辺睦夫「みことばとみ霊の間」
1997	36	水上 勲、安村仁志、松浦 剛、隈上正敏、黒川雄三、西堀剛男	橋本昭夫「礼拝の秘儀とダイナミズム」 西部より	パネルディスカッション 杉山明「なぜ詩篇歌を歌うのか」、井上 義「世界の現代讃美歌の流れについて」、野町真理「ワーシップ・プレイズと礼拝」
1998	37	松浦 剛、安村仁志、黒川雄三、佐々木保雄、隈上正敏、杉山 明	加藤常昭「届く言葉を求めて」 外部より	服部滋樹「新約聖書におけるエルサレム」
1999	38	松浦 剛、安村仁志、佐々木保雄、隈上正敏、黒川雄三、杉山 明	鷹取裕成「旧約聖書からの説教」 西部より	西岡義行「プロテスタントにおける教会と宣教の相互関係」
2000	36	松浦 剛、安村仁志、佐々木保雄、隈上正敏、黒川雄三、渡辺睦夫	藤原導夫「ポスト・モダンと説教の行方—聖書と今日の人々を結ぶ説教を求めて」 東部より	神谷聡子「『讃美歌 21』についての一考察」、レスポンス：安西幸男「讃美歌 21 の歌詞の神学的意味」、後藤喜良「讃美歌 21 を教会で使用して」

2001	38	松浦 剛、安村仁志、佐々木保雄、隈上正敏、黒川雄三、渡辺睦夫	岡山英雄「患難期と教会（黙示録の終末論）」 同「黙示録をどう読むのか」 東部より	鈴木英昭「北米の長老教会の歴史と日本キリスト改革派教会」、石川正「コミュニケーション・ツールとしてのインターネットに関する一考察」
2002	42	松浦 剛、安村仁志、佐々木保雄、隈上正敏、黒川雄三、石川 正	牧田吉和「福音主義神学における 21 世紀の課題—終末論をめぐって」（中部部会設立 20 周年記念講演会） 西部より	安村仁志「ロシア正教会の現状—世界の動き、福音宣教を考えるために」 野町真理「『神の痛みの神学』のキリスト中心的理解—キリスト者の生活における苦難の積極的意味を求めて」
2003	40	安村仁志、石川正、佐々木保雄、隈上正敏、黒川雄三、松浦 剛	藤本 満「女性教職者論」 東部より、(東海聖書神学塾と共同開催による神学講演会)ミラード・エリックソン「岐路に立つ福音主義」(1「三つの誤った道」、2「選ぶべき道」)	東 正明「イエスの目的の対応について—牧会カウンセリングへの応用のために」、相馬伸郎「日本改革派教会の創立と日本における福音主義教会形成の課題について」
2004	37	安村仁志、石川正、佐々木保雄、松浦 剛、相馬伸郎、水上 勲	内田和彦「新改訂聖書・改定第三版をめぐって—新約聖書の改定箇所を中心に」 東部より	檀原久由「児童福祉論との関連からみるキリスト者像」、小林茂「ゆがめられた愛情依存—教会共同体と境界性・自己愛・人格障害の諸問題」

2005	37	安村仁志、石川正、佐々木保雄、松浦剛、檀原久由、相馬伸郎	工藤弘雄「キリスト者の霊性—救済論に基づく実践的霊性」西部より	渡辺睦夫「三つの歴史(ローマ・カトリック、ギリシア正教、プロテスタント福音主義)から：霊性と神学の問」、関 昌宏「ジョン・ウェスレーと東方教会」
2006	37	安村仁志、石川正、佐々木保雄、松浦剛、檀原久由、相馬伸郎	渡辺 聡「ポストモダン社会に対するキリスト教の応答」東部より	川口一彦「中国景教の歴史と教義」、木下裕也「植村正久『真理一歩』に見るキリスト理解」
2007	35	安村仁志、石川正、佐々木保雄、松浦剛、檀原久由、関 昌宏	倉沢正則「日本伝道の流れから：家の教会運動の実践神学的検討」東部より	松浦 剛「地域密着型伝道—そのあり方と課題」、山崎ランサム和彦「初代教会のローマ帝国観：ルカ文書におけるケーススタディ」
2008	33	安村仁志、関 昌宏、佐々木保雄、檀原久由、東 正明、池上 泉	市川康則「教会の宣教としての礼拝——特に説教の響きと広がりを目指して」西部より	田中 忍「キリスト教会と環境問題—エコ・チャーチの働き」
2009	34	安村仁志、関 昌宏、佐々木保雄、檀原久由、東正明、池上 泉	金井由嗣「福音主義者としての教父研究のモチベーション」西部より	白井 仁「ファン・ルーラーの聖霊論」
2010	33	安村仁志、関 昌宏、佐々木保雄、檀原久由、東 正明、池上 泉	有賀喜一「主が建て上げられる打ち勝つ教会」中部より	服部滋樹「チャールズ・シメオン：その生涯と影響」

* 1982 年度 中部地区在住の西部部会員で発足

これを振り返ってみると、設立時の活動方針に従い、春に部会総会と公開講演会、秋に部会メンバーによる研究発表会が欠かさことなく行われてきたことは大きな恵みである。その上でまとめてみたい。

①部会メンバー

20 名前前で始まり、最も多いときで 42 名、近年は 35 名前後となっている。初期の名簿(1986 年)によれば、同盟 6、改革派 4、同盟福音 4、長老 2、福音自由 2、アッセンブリー 2、信徒 2、宣教師 1 他(計 37)であった。最近の状況については、年齢面で 70 代 9 名、60 代 11 名、50 代 9 名、40 代 5 名であり、高年齢化が進んでいる。専攻分野では、組織神学・教義学・聖書学系 13 名、教会史系 5 名、宣教論等実践神学系 6 名、カウンセリング等心理系 2 名、その他宗教学 1 名、教会教育 1 名といったところである(複数分野に関心領域のあるケース、特に定めのケースもある)。

②理事会

部会活動を続けるために、年 4 回理事会(概ね 5 月、7 月末又は 8 月初、11 月、2 月)が開かれ、協議に当たってきた。理事会の主な働きは、総会及び引き続いて行われる公開講演会の準備・運営(講師の選定、案内、当日の進行等)、部会メンバーによる秋期研究発表会の準備・運営(発表者の募集、交渉、案内等)、理事選挙の準備(候補者の選定、案内、開票等)、会計処理、全国理事会関連の業務の遂行(各種委員会への参加、全国研究会の発題者等奉仕者の選定、学会誌原稿執筆者の選定 etc.)、部会会員の異動の確認及び入会の勧めなどである。その理事選出については、当初より選挙によって行ってきたが、1987 年に、業務の継続性を考慮するとともに、新しい方々にも加わっていただくことを願って、選挙規定が改正され(5 月 11 日総会で決定)、6 名制(毎年半数改選)になった³。これまで理事を務めてきたメンバーは、長老教会(2

³ 1987 年 5 月 11 日総会の決定

・'88 年の改選期より定数を 6 名とし、改選数の倍の候補者(被改選理事を含めて 6 名を理事会で推薦し、会員に通知、郵便投票によって選出する。
・'88 年に限り、上位 3 名を 2 年理事、下位 3 名を 1 年理事とする。

名)、アッセンブリー・オブ・ゴッド教団(1)、福音自由教会(1)、バプテスマ教会連合(1)、同盟福音キリスト教会(3)、改革派(5)、福音教会連合(2)、同盟キリスト教団(3)、イエス・キリスト教団(1)、ホーリーネス教団(1)、バプテスト宣教団(1)、チャーチ・オブ・ゴッド教団(1)、単立(1)、信徒(1)となっている。

③講演会

部会員だけでなく、広く地域の牧師・信徒が神学の諸テーマに触れられるようにとの趣旨で公開にして講演会を企画し、東部・西部から来演者を招いて実施してきた。テーマ・講師は学会誌のテーマに合わせ、時宜に合ったテーマを選定する、全国理事長或いは東部や西部理事長に来演を願い交わりを深めるなどによった。また、定例の午後に加え、夕方から信徒向けと二回の講演会を実施する年もあった。ここには、中部部会の会員が多くないこと、直接神学教育に携わっている者がさらに限定されるということから、広く神学の動向に触れられるようにする傾向があったことが現れている。それぞれ専門的テーマの講演であったが、それを受けて部会内でさらに突っ込んで研究を深めることは、残念ながらそれほどみられなかったことも、上の事情を反映している。二度ほど神学会の枠を超えて講演を依頼したことがある。一つは、美濃ミッション主幹の石黒次夫師による「美濃ミッション事件とその教訓」、他は説教塾主宰者の加藤常昭師による「届く言葉求めて」であった。石黒師は中部圏で戦時中弾圧を受けたグループの貴重な証言を交えて話され、貴重な学びをすることができた。また、加藤師の講演会には大きな注目が寄せられ、60名以上の参加者があった。説教をする者、説教を聞く者双方にとって関心の高いテーマであり、本神学会以外の方を招くことについては理事会で慎重に議論をしながら進めたが、意義深い企画となったように思われる。

④部会内研究発表会

発表者と発表内容(上記一覽参照)を見ると、それぞれが取り組んでいるテーマに基づき多彩である。先のことと重なるが、会員の数が少なく、関心のあるテーマが分散していることから、東部のように分科会を形成することに

・'89年より毎年半数改選とする。

はつながらない。他面、毎回異なるテーマで幅広く学びをすることができるといふ機会にもつながっている。その中で当地域の宣教の歴史にかかわる発表がいくつもあったことは特徴的である。鈴木健之氏「明治期聖公会の岐阜伝道の研究」(1987年)、奥御山頼義氏「同盟高山教会の週報に見る戦時中の礼拝」(1991年)、松浦剛氏「地域密着型伝道—そのあり方と課題」(2007年)がそれに当たる。二度、讃美歌をテーマにしたパネル・ディスカッションも行われている。

Ⅲ. 部会設立に関連した動静—名古屋信徒聖書学校、東海聖書神学校

A. 東部と西部の間にあって、神学教育の狭間にあった地域に部会が成立するには、冒頭で述べたような西部・東部の支援があったことである一方、後に触れるこの地区独自の福音派神学校である東海聖書神学校塾の誕生にも関連する一定の下地があったことにも触れておかねばならない。

それは1965年から1987年まで開かれていた名古屋信徒聖書学校である。神学会中部部会設立時に理事長を務めた黒川雄三氏が当部会報第2号(2002年)にこの聖書学校について振り返った文章を寄せておられるので⁴、それをもとに簡単にみておきたい。1965年8月18日にダン・マカルバイン師(Team)宅で開設に向けた協議がなされた。改革派の大山忠一師、同盟基督教団の小林初之輔師、長老教会の堀越暢治師とカルビン・フレット師により基本方針が定められ、理事長フレット師、校長大山師、以下理事と役割分担が決定されるとともに、会費(10回を通して一人1000円)、講師謝礼(1回500円)、開設科目と担当者などが決められた。同学校の基本方針は、福音主義信仰に立ち、超教派で信徒に対する教育と実践的訓練を行うことであった。同年秋の最初の講座は9月27日より11月29日までの期間に毎週月曜日の夕6時から8時50分まで、20分のチャペルタイムをはさんで、「イエスの生涯」、「個人

⁴ 「福音主義神学会中部部会報」第2号(2002.5.13)、「『名古屋信徒聖書学校』について」、1-8頁

伝道法」、「新約聖書概論」(各 45 分)が行われた。合計出席者は 65 名(信徒 52 名、未信徒 13 名)であった。以来、75 年頃までは、毎年、冬期、春期、秋期の三回、各 10 週にわたり、毎月曜日に①聖書そのものの学び、②教理の学び、③信仰の実践の学びを柱に講座が開かれた。講座の担当教師を見ると、多くの科目を担当した大山校長⁵のほか、神学会中部部会のメンバーになった者たちも多い。また、学期始めには公開講演会が開かれ、東部部会、西部部会のメンバーの方々が来演され、働きを支援しておられる(宇田進師、入船尊師、井出定治師、岡田稔師、榊原康夫師、薦田二雄師、舟喜信師、森山論師、山口昇師、鍋谷師、松見睦男師など)。こうして地道に続けられた信徒聖書学校は、信徒教育をも担う東海聖書神学塾に引き継がれる形で 1987 年に閉じられることになった。

B. 東海聖書神学塾(TTS=Tokai Theological Seminary)との関係

中部部会が設立された頃と機を一にしてこの地に神学校の設立が準備されたことも主の導きであった。東海地区にも福音派の神学校をとのヴィジョンが超党派で持ち上がり、神学会中部発足の 1982 年から、実現に向けて祈りが捧げられるとともに、準備の話し合いが始まった。1984 年 8 月に聖書神学舎(当時)校長の船喜順一師を講師に東海地域神学校設立準備の合宿・勉強会が開かれた。当神学会中部部会の会員を中心に 6 名が参加し、協議がなされ、東海地域の教会のため、東海地域の働き人による、東海地域の献身者養成機関であること、東海地域の諸教会の祈りと支援によって支えられること、東海地域の諸教会に仕え、牧師及び教会献身者の神学研鑽と霊的訓練を実施する学び舎として、主の世界宣教に貢献するために”設立することが確認された⁶。こうした準備を経て、同年設立総会がもたれ、基本理念、方針が承認され、評議員会、理事会が開催され、1985 年 4 月 14 日開塾した。7 月 22-24 日には宇田進師による第 1 回の夏期公開講座「福音主義キリスト教とは何か」が開かれている。福音主義に立ち、東海地域諸教会の教会教育の一環と

して教職者及び信徒奉仕者を神学教育すること、教派を超えた教会との協力を土台として運営することが特徴(理念)として掲げられた⁷。以来 25 年になるが、学びをもとに多くの教職者、信徒奉仕者が巣立ってきた。神学会と神学塾の協力のもとに東海地区の神学の研鑽・教育がなされてきたといえよう。神学会のメンバーの多くが神学塾での教育にも携わってきたこと、それぞれが主催する講演会等には互いに参加してきたこと、全国神学会議開催に当たっては塾生の参加・協力があつたことなどに現れている。ただ、神学塾の運営にあたる理事や運営委員も、いわゆる“専任”ではなく、牧会や神学会の活動と並行しての働きで、多忙であつたことは否めない。

以上のように、東海・中部地域の福音派においては、神学校がないために早くから超教派による信徒教育の場が設けられ、牧会と並行して牧師たちが奉仕に当たつてきたといえようが、そうした下地のもとに牧師自身の神学的研鑽の場として神学会中部部会も誕生したのである。

IV. 中部部会の歩みを振り返って

筆者は神学会中部設立から継続して理事を務めてきたことから、20 周年の時点で一度感謝を含め総括している⁸。設立総会で決定された、春の年次総会と公開講演会、秋の部会会員による研究発表会の開催という基本的活動は、一度も欠かすことなく続けられた;会員も設立当時よりは増え、会計も守られた;「福音主義神学」詩及び全国研究会議にも随時部会会員が微力ながら一翼を担うことができた;設立以来西部・東部の協力のもとに活動が維持されてきた;東海聖書神学塾が与えられ、さまざまな協力ができるようになった、ことなどである。一方課題として挙げたことは、会員数に比して、総会や研究発表会の出席者が必ずしも多くなかった;決して恥ずべきことではないが、総じて活動が啓蒙的なものになりがちである。一定の研究レベルの維持をはかりながら、なるべ

⁷ 河野勇一塾長による。同上、2 頁

⁸ 『中部部会会報』第 4 号(2003. 5. 19)、安村「福音主義神学会中部部会の 20 年」、1-3 頁

⁵ 大山忠一氏は神学会中部発足とともに「名誉会員」となっておられる。ご高齢で部会活動には出られないが、発足までの御勞に感謝してのことであった。

⁶ 鈴木健之理事・運営委員による。『東海聖書神学塾二十周年記念誌』(2005. 3. 21)、5 頁。

く多くの方々の参加が得られるような活動をしなければならぬ。福音主義に立ち、この地区の教会と福音宣教に資する働きのある方をもとめていかねばならないといったことである。

「成人」を迎えた後の中部部会にとつての大きな恵みは、2005年に東部部会の協力を得ながら、全国研究会を名古屋で開催したことである。11月にYWCAを会場に116名の参加者を得て、三日間の日程で行われた。小部会ゆえ、これまでは出席と発題等による参加であったところを、一歩踏み出すことができた。この全国研究会について理事会でも振り返ってみたところをまとめてみると、東部とのタイアップ方式（東部がプログラムの立案、それに関する交渉、案内・資料集の準備を担当、中部は会場の準備、会計その他を担当）がうまく機能した；全参加者116名の内神学生が西部、中部を中心に43名と目立っていたが、今後の神学会を担う方々につながるべく多くの期待でき、感謝であった；中部にとつては、地元開催のゆえ部会会員が多数参加できたほか、東海聖書神学塾の塾生も積極的に講演、分科会に参加できた；部会会員の中から、発題講演（渡辺睦夫、坂本誠）、司会（相馬伸郎）、閉会礼拝説教（安村）の奉仕に与ることができた；部会と東海聖書神学塾が協力し、働きを分担することができた；運営面でも、中部は東部や西部の役員方と随時連絡をとりながら責任を果たすことができたなどが挙げられる。「霊性」をテーマとした研究会議そのものについては、世界も日本も、社会の諸相において「信頼」というものが失われ、動きが全般的に乱暴になってきている今日、人は息を抜くことができない状況のもとに疲れ、苦しんでいるが、そういう社会のニーズに福音派がどのように応えられるかが問われ、福音主義の「霊性」とは何かについてキリスト教の歴史を縦軸に総括的に振り返られるとともに、宗教改革の遺産を踏まえて現代の諸課題があげられるものとなった。他方、キリスト教の幅という面において、カトリックや東方正教会の「霊性」ということについてもとよりあげられたことは、これまでになかったことであった。

次の2008年の研究会議（神戸）では、中部の会員がさらに積極的に発題・応答などの面でも役割を担うことができた（《講演》河野勇一、《応答》相馬伸郎、《司会》松浦剛、《開会説教》安村）。徐々に、一部会として自立的役割を担うことが出来るようになってきている。

さらに、設立来28年を経た現時点での総括をしてみたい。西部から独立の形で発足し、西部・東部から支援をいただきながら歩み出し、当初立てられた基本活動は維持されてきた；全国レベルでの活動にも一定の役割を担えるようになった；学会誌編集、JETSニュースの編集、全国研究会議の役割分担も少しずつ行えるようになった。そうした意味では、独立・自立が実現してきたといえる。同時に、年1度の講演会では、東部或いは西部から来演していただき、部会ができたといえ、なお東京、関西にまでは出かけにくい当地の会員が交わりを持つ機会、講師の方々には中部の様子を知っていただく機会とし、つながりを大切にできた。さらに、小回りの効く部会ということもあって、動きがとりやすく、会報を発行し⁹、講演会・研究発表会の内容（原稿依頼）、会員の研究を載せるとともに、会員が普段思わされていることなどを気軽に寄稿する“交流”誌としてきた。一方、運営のための会計面では、少数部会であることととも当初から長く“優遇”措置をとっていたことは忘れてはならない。会員数も前掲資料の通り、概ね30名台半ばをキープしている。

こうして部会が続けられてきたことについては、それ自体意味のあることだと思われるが、問題がないわけではない。既に触れてきた部会の体質的弱さ以外のところで考えると、会員が増えない、それゆえに高年齢化が進んでいる、総会・講演会、研究発表会の出席者が必ずしも多くなく、限られていることなどが浮かんてくる。背景として考えられることは、「課題」につながることで、次項で述べてみたい。

V. 神学会(全体)の課題

ルターによる宗教改革500年が間近になった今日、まず、われわれはプロテスタントの信仰を改めて問い直さなければならない。カトリック、古い伝統を保持する東方正教と比べて、プロテスタントのもつ特質は何かについて思い巡らすとき、ロシア正教会の研究に取り組み、それとの関連でカトリックの歴史

⁹ 2001年度に『中部部会論集』として発行され、次年度からは『中部部会報』となり、10号まで至っている。第7号は1-6号までのリストが掲載されている。

にも注意を払いつつ、プロテスタント福音主義に立った信仰に生きようと願っている身からすると、われわれの“近代性”に行き当たる。それには、ややもすると“合理的”、“理智的”に加えて“個人的”という要素が結びついてくるように思われる(正教の他派評に、「カトリックは自由なき統一、プロテスタントは統一なき自由」がある)。プロテスタントにおいては、聖書第一主義に基づき、厳密な聖書研究や釈義の必要性が生まれる一方、近代的精神の影響を受け、神学が学問化、細分化されてきた。学問化が及ぶと合理的論法が入り込み、「議論」の場となり、伝統的信仰からの逸脱も生じ得る。また、細分化とともに「社会学的」、「心理学的」要素、すなわち文化論的アプローチも入ってくる。これらを通して神学が神を離れた学問になる可能性が生じた。福音派では、信仰をもって学問に取り組む姿勢が基本であったが、「信仰」と「理性」という一般的には対立的な要素を、ともに神から与えられた賜物、神から離れない人間の営みとして働かせてきた。「霊性」をもって単なる盲信的護教論に陥らないようにしつつ、学的営みを通し神をより深く知り、宣教に結び付けようとしてきたのである。にもかかわらず、カトリックと正教が聖書とともに真理を伝える重要な要素としている「聖伝」に当たるもののみ立つという「近代性」「合理性」(して退け)、聖書正典に書かれているもののみに立つという「近代性」「合理性」をわれわれは体質として持っているであろう。また、信仰を具象的に示す「表象的」なものは十字架以外には持たないことも「合理性」と結びついているであろう。そうした体質においては「霊性」ということが捉えにくいことにつながりそうである。さらに、プロテスタントでは、純粹性を求めて次々に分派が生まれ、統一的組織がない。個人、グループを問わず、「神と我」という言葉、個人的信仰が自律的であることの反面、「近代性」を背負っていることになる。これらは、恐れを覚えつつ述べるが、近代的な人間文化の影響を受けやすくなるものになっていないであろうか。今日神学が一般文化の特徴と同じく、現象学的になってきていることはその現れではない¹⁰。

¹⁰ 宇田進氏は著書『現代福音主義神学』(いのちのことば社、2002)において、主として近代以降の神学・哲学の動向と文化現象を俯瞰しながら、福音主義神学の課題を挙げておられるが、文化との関係では、フォーサイス、ニーバー、バーガー、エリクソンなどを引いて現代におけるわれわれの問題性を指摘されている。

われわれは現代の一般的な文化の流れに影響を受けていることに気づかなければならない。可能な限り早く、目に見える形で成果を求める傾向(数理的で効果・効率優先、可視的価値の追求);さまざまなことが部分的で総合化されない、全体を見ない、従ってつながりがない傾向(表面的・部分的・孤立的で連関性の欠如);理智的なものより感覚的なものが好まれる傾向(理念より感覚重視で情緒的);移り変わりが激しく、深める余裕のない、あらゆることがお題目的になる傾向(ジャーナリスティック)などの影響がわれわれの信仰、宣教、神学研究に及んでいないかということである¹¹。本質論、それにかかわる理論的考察、哲学的議論を敬遠し、現象的・実践的問題について部分的(非総合的)に論じることになっていることが学問全体にいえるとき、われわれの神学の営みはどうか。そのような観点で見ると、神学の営みが組織神学的なものより方法論的なものになってきていると言えまいか。また、若い牧師の神学離れは著しい(神学よりも文化的伝道活動への関心、総体的な読書量の減退。神学研究が信仰を強め、霊性と高めるという意味で有機的に結びつき、それが宣教を突き動かしていくというメカニズムにおいて必ずしも十分でないから、神学研究よりも実践的な問題の方に向かわせてしまうのではないか)。教会活動においても、ロイドジョーンズが鋭く指摘したように「交わりを教理に優先させている」¹²傾向がある。神学がジャーナリスティックになっただけではない。エズラの嘆きとその中から神に依り頼み立ち上がったことに耳を傾けたい(「エズラ記」9章1-9節)。エズラが問題にしたイスラエルの民の異教徒との「雑婚」の問題は、今日われわれにとっては「文化的風潮」ではないか。とりわけ、「至便性」のもとに人間のコミュニケーションのとり方、それに基づく人間関係に重大な変化を与えている今日の「情報革命」には特段の注意を払わなければならない。新しい伝達手段に内在する、見せる要素、パフォーマンス性が伝える内容の浅薄さ、表面性につながる時、福音伝達の不完全さを生じさせないか(見てもらう、聞いて

¹¹ 変化の激しさ、文化のジャーナリスティック性との関連では、前掲書(宇田氏)に「神学的“寿命”の短命化」という、刺激的ではあるが、当を得たフレーズがある(85頁)。

¹² ロイドジョーンズ『教会とは何か』(鞭木由行訳 いのちのことば社)、21-35頁

てもうたためには、目障り・耳障りなものは控えるという心理)。

次に、われわれにおいては神学と霊性(信仰)と宣教が結び付けられてきた点について自己吟味したい。正しく信じるために神学をし、その学びが信仰に受肉し、霊性が整えられて宣教に向かうということであるが、この関係が有機的に結びついているか点検せねばならない。さまざまな見方があるが、筆者は「霊性が精神化していないか」とのヘンリ・ナウエンの指摘に注目している¹³。「霊性」という課題に取り組むにあたって、学的レベルの理性の段階で留まっているのではないかという指摘であろう。精神化、つまり肉体と分離したものになっていないかということである。ここでいう「肉体」とは、実態的信仰とそれに基づいた宣教が想定されている。2005年の全国研究会議のテーマが「霊性」であり、続く2008年のテーマが「伝道」であったことは、その意味で当を得たものとなっている。しかし、これらのテーマに向かつての研究、それが披露され討議されたことが、受肉しなければならぬ。そのためには3日間では足りないのではないか。少なくとも、当該年度くらいは各部会の研究会などで深める必要があるのではないだろうか。

もう一点、福音派の資産でもある『新改訳聖書』の一部をめぐる翻訳の問題と絡めてわれわれの体質について吟味したい。ローマ人への手紙12章2節について、新改訳は「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみところは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられて、完全であるのかをわきまさえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい」と訳している。まず____部について、口語訳をはじめ他のほとんどの訳は「造りかえられ」「変えていただく」などとなっている。次に、____部については、「神のみところを知る」ことを他が結果として訳しているのに対し、目的としていることに気づく。どちらも新改訳は積極的、能動的表現である。信ずる者の信仰を働かせることに重きをおいているのであろうが、信仰を働かせるのは「心の一新」或いは「心を新たにすることであって、自分で“自分を変える”ことではないであらう。加えてそれは“神のみところを知るため”となると、一層われわれの

¹³ ヘンリ・ナウエン『イエスの御名で一聖書のリーダーシップを求めて』(後藤敏夫訳 あめんどう)、69-70頁

側の action の趣きが強くなるように思われる。極言すれば、信仰に根ざしているとはいえ、do の趣きが強いと感じられる。プロテスタント福音派の姿勢の一端が垣間見られる例ではないか。対照的に、東方教会には「否定神学」という一つの伝統がある。人知を超えた神を有限な人間の知恵で理解することはできないということに立ちながら神に向かうというものである。パッシブな姿勢が前提となっているように思われる。また、正教では「神学」と「神秘」が結びつけられる(「神秘神学」という言い方をする¹⁴)。人間が神になるうとする近代以降の人間の営みを見透すかのような古代的・神秘的姿勢が見えるが、示唆的である。しかし、宗教改革者ルターも『マリヤの賛歌』で、マリヤが神の母とされたことを徹底的に、一方的な神の恵みとしつつ、小さき者、乏しき者かえりみりて大きなみわざをその身になしてくださったことを深く覚え、感謝を超えて、ただただ神を賛美していると切々と説いており、神の恵みに対して人はただ受動的であることも強調している。プロテスタンティズムの原点がここにも高らかにうたわれていたが、それは神の恵みのうちに感謝をもって身を置き(be)、恵みに満たされ、聖霊の力をいただいて人々のあいだに立つ(be)ことが強調されている。「BEよりDO」の今日の風潮とは全く異なる“DOよりBE”を福音に読み取り、それを世に示していくことがわれわれの立場であることを思うとき、翻訳も学に裏付けられた重要な問題であることから、一つ問題提起させていただいた。

冒頭に掲げた奇妙なエピソード(キツネーハリネズミ論¹⁵)についても同様である。福音派は本来ハリネズミ型であるはずのところ、ややもすると神学テーマが時代を追うあまり、キツネ化してきたのではないか。紙幅の都合上これ以上述べることはできないが、これも、中部部会の歩みについて振り返ることを超えた、個人的な見解であることを思いながら、敢えて「福音主義」に立つ「神学研究」のあり方を考える問題として挙げさせていただいた。

(中京大学教授、福音主義神学会中部部会理事長)

¹⁴ V. ロッスキー『キリスト教東方の神秘思想』(宮本訳、勁草書房、1986)

¹⁵ I. パーリン『ハリネズミと狐ー『戦争と平和』の歴史哲学』(河合秀和訳、岩波文庫)を参照されたい。